

遺産動機はどのように形成されるか

利他的遺産動機、戦略的遺産動機、遺産動機無しの比較

1999・9

横浜市立大学商学部

松浦 克 己

大阪市立大学経済学部

滋野 由紀子

1 はじめに

遺産動機は、家計の貯蓄や就業行動を左右し、ひいては一国全体の富の分配や成長にも影響することが指摘されている¹⁾。

我が国に関しても、Dekle[1989]は高齢者の貯蓄の取り崩しの少なさは遺産動機の強さによることを報告している。大竹[1991]、Ohtake[1991]は遺産動機が高齢者の貯蓄や労働供給を高めることを実証している。中馬・浅野[1993]は男女別に遺産動機の強弱の要因を検証し、遺産動機が生命保険需要を高めることを明らかにした。大竹・ホリオカ[1994]は、遺産動機を持つ者の住宅資産の取り崩しが遅いこと、利己的な遺産動機と仕送りや親子の同居の関係などを検証し、遺産は我が国では老後の面倒の見返りの色彩が強いことを明らかにした。また松浦・滋野[1996]も遺産動機が生命保険需要を高めることを明らかにしている。

近年我が国では資産所得の不平等が拡大していることが指摘されている(Matsuura and Shigeno[1999]、橘木[1999])。これには遺産動機、世代間の富の伝達そのものを目的とする利他的な遺産動機が影響している可能性がある。たとえば麻生・神谷[1998]はライフサイクル的に行動する家計が大半であるものの、麻生[1998]では1994年の全国消費実態調査を用い一世帯あたりおよそ1億円(その内70～80%が土地)の遺産が残されており、純粋なライフサイクル仮説では説明しきれないことを報告している(Barro流の遺産動機のほかに結果として残すことが考えられるとしている)。

また高齢化で介護問題などが深刻化している。しかしこの問題には介護保険等では対応できないことが危惧されている。その場合、大竹・ホリオカ[1994]が示唆するように、遺産を残すことで介護を頼むという形の戦略的な遺産動機で人々は対応することも予想される。さらに長期的な労働力不足と年金財政の破綻から、高齢者の就業促進の必要性が言われている。高齢者の就業が遺産動機と関連することはつとに指摘されている。

しかし遺産動機がどのように形成されるかの実証分析は少ない。それらの先行研究も子供との同居や、子供から親への仕送りを代理変数として間接的に考察するか、あるいは遺産動機を持つか持たないかの二値的選択に限定し、利他的な遺産動機と戦略的な遺産動機を区別して取り上げることはしていない。

遺産動機はその内容により社会的な意味は異なる。積極的な遺産動機を持つとしても、それが利他的なものであればそれは富の分配の不平等につながるが、戦略的なものであれば家族内社会保障として機能しよう。積極的な遺産動機を持たない場合でも、それが寿命の不確実性を重視し、いわば余れば残すというものであれば、予備的貯蓄動機から資産の取り崩しは相対的に少なくなり、高齢化の中でも貯蓄率の低下は緩やかになるであろう。寿命の不確実性よりも全く残さないということを重視するものであれば、高齢化の中で貯蓄率は大きく低下しよう。世代間を通じた富の移転の減少により、不平等は縮小しよう。

そこで本稿では、遺産動機を利他的遺産動機、戦略的遺産動機、遺産動機(余れば残す)、遺産動機無し(遺産を残すつもりはない)の4種類に分けて、それらがどのような要因で形成されているかを検証する。それにより高齢化が急速に進む中で、遺産動機の形成が社会にどのようなインパクトを与えるかの考察の手がかりとしたい。

様々な形の遺産動機がどのように形成されるかの分析には、各経済主体の遺産に関する意志とその経済状態、家族構成などを知る必要がある。本稿ではこれらを知り得る個票データ(1996年「家計における金融資産選択に関する調査」郵政研究所)を用い、より厳密に検証する。これが本論文の第一の特色である。

遺産動機は各個人毎に形成されるので、家計で単一の意志とは限らない。具体的には男女(夫婦)で異なる可能性がある。平均的な婚姻状態からすれば夫

は老後の世話は妻に依存するであろう。妻は子供に依存することもあるが、むしろ自立して老後を送ることも多いからである。そこで本稿では男女で遺産動機に関する関数が共通かどうかを、併せて検証する。これが本論文の第二の特色である。

多肢的選択モデルでは、その関数から得られる係数の解釈は必ずしも容易ではないことがある。直接的な解釈は限界効果（マ・ジナル効果）による方が容易である場合が多い。実際の解釈に当たってはその点に配慮が払われる。

本論文の構成を簡単に述べる。第2節でデータの概要と遺産動機の取り上げ方について解説する。第3節で実証モデルの考え方と計量方法について説明する。第4節で推計結果を紹介し、最後に本論文の簡単なまとめと残された課題についてふれる。

2 データについて

1) データの概要と遺産動機の取り上げ方

本論文では1996年の「家計における金融資産選択に関する調査」（郵政研究所）を用いる。同調査は全国の世帯主が20歳以上の家計について6,500世帯を対象として行われている。実際に回答されたのは3,942サンプルである。

同調査では世帯主の年齢、性別、配偶者の有無、職業、勤務先企業規模、学歴、世帯人員、子供数や子供との同居状況等に関する家計の属性を知ることができる。また世帯の金融資産や負債、持ち家の有無等の世帯の資産状況が報告されている²⁾。

遺産との関係では、世帯主またはその配偶者の遺産の受け取り経験の有無が報告されている。これは世代を越えた富の伝達がなされているかどうかを知る手がかりとなる。回答者自身の子供に対する遺産動機については

遺産（生前贈与を含む）はいかなる場合においても残す

遺産（"）は子供が面倒をみてくれた場合に限って残す予定

遺産（＃）は子供が事業を継いでくれた場合に限って残す予定
遺産（＃）を積極的に残すつもりはないが、余った場合は残す
遺産（＃）を残すつもりはない

の5つのパターンが調査されている³⁾⁴⁾。これから我々は、多様な遺産動機が、家計のどのような属性に影響されているかを分析することが可能となる。

「いかなる場合においても残す」には、子供が可愛いという形の利他的な遺産動機と遺産そのものを目的とする（いわば家系の社会的名声を維持増加するために富の伝達自体を目的とする）場合が含まれよう。経済的效果は変わらないので、これを一括して仮に利他的な遺産動機と名付けることにする。むしろ富裕な階層で利他的遺産動機が強ければ世代間移転を通じて、富の分配はより不平等となる。

「子供が面倒をみてくれた場合」は、暗黙の年金契約に該当するものであり、親子世代で消費をプ－ルすることになる。かつて非常に高い比率を占めた三世代同居は、この暗黙の年金契約と密接に結びつくものといえよう。今後介護問題が深刻化すれば、高齢者世代は遺産を残すことで子供世代に介護を頼るという形で、このウエイトは高くなることもあり得よう。「事業を継いでくれた場合」は、世代間の富の移転を意味することもあるだろうが、農業や自営業でみられるケ－スは事業を継いで親の生活の面倒をみると考える方がより実際であろう。そうであれば「事業を継ぐ」場合に遺産を残すということは、広い意味では暗黙の年金契約、あるいは遺産により子供の行動に影響を及ぼそうとする戦略的遺産動機と捉えることができる。本稿ではこれを一括して戦略的遺産動機として扱う。

「余った場合は残す」というこのケ－スは積極的に意図して遺産を残すわけではないが、結果として遺産を残し子供世代に富を移転することになる。これらの人々は、ライフサイクル仮説的に人生を送るが、寿命の不確実性から人々の貯蓄の取り崩しスピードは、寿命が確実である場合に比べて緩やかになることが多いであろう。従ってこのような人々が多ければ、予備的動機に基づく貯蓄が高くなるので、高齢化の進展の中でも貯蓄率の低下は緩やかとなる。平均寿命が延びつつある日本では寿命の不確実性も高まるので、この比重は無視できない可能性がある。

「残すつもりはない」は寿命の不確実性を重視するよりは、ライフサイクル仮説の世界を生きる人々と捉えることができる。これらの人々が増えれば、日本の貯蓄率も高齢化の中で急速に低下することが予想される。また世代間の富の移転を通じた不平等は縮小するであろう。

遺産動機の形態を以上の４パターン、利他的遺産動機、戦略的遺産動機、遺産動機余り（予備的貯蓄を行い余れば残す人）と遺産動機なし（純粋ライフサイクル仮説に生きる、残さない人）に分けて分析することにする。

また世代間の所得移転を表す遺産の受け取り経験については、「すでに遺産（生前贈与を含む）を受け取った」、「双方の両親共に遺産相続や贈与は終了したが、受け取らなかった」、「まだ、遺産（＃）を受け取っていない」という形で質問されている。これにより遺産受け取り経験の有無をコントロールする事ができる。

2) サンプルの取り上げ方

まずデータの信頼性を確保するために、以下のサンプルは分析から除いた。

世帯人員、世帯主の職業、世帯主年齢、世帯主の性別の各項目について回答の無いもの。

合計収入各欄（世帯員毎）とも回答のないもの。

世帯主の収入について回答のないもの

金融資産合計が零かつ収入合計が零のもの。

生活費の回答のないもの。

可処分所得が負となるもの。

子供数の回答のないもの。

また分析の目的上、遺産動機について回答のないもの、遺産受け取り経験の有無について回答のないものも除いた。遺産動機という意識を問う質問なので、世帯主、または配偶者以外の者が回答者であるケースも除いた。

遺産動機について若年世代よりも、中高年世代の方がより差し迫っていると考えられるので、分析は世帯主年齢が50歳以上の者とした。

これらの結果、用いたサンプルは1,265である。

主要な変数の記述統計量は表 1 に掲げるとおりである。遺産動機についてみると全体では「余れば残す（遺産動機（余り）」が約半数を占める。利他的遺産動機と遺産動機無しがそれぞれ約 20%である。我が国ではライフサイクル仮説的な意識を持つ人が約 2 / 3 である。しかし余れば残すという人の多さからすれば、高齢化による寿命の不確実性の増加は、貯蓄率の低下を緩和するかもしれない。

回答者の性別で比較した場合注目されるのは、利他的遺産動機である。男性は 25%（標準偏差 0.44）であるが、女性では 15%（標準偏差 0.36）に留まる。女性がかかなり低い比率となっている。その裏返しとして遺産動機無しは、男性が 18%（標準偏差 0.39）、女性は 25%（標準偏差 0.44）である。これは男女間で遺産動機の形成の仕方が異なる可能性を示唆している。またしばしば言われるように、高齢になると女性の方が自立心が高いのかもしれない。あるいは日本の実状では妻名義の財産が少ないことが、影響しているのかもしれない。

==== 表 1 ====

3 実証モデルの考え方と計量方法

1) 実証モデルの考え方

遺産動機の形成に関する要因としては、先行研究を参考に以下のような候補を取り上げることとする。

まず所得と資産が遺産動機に影響するであろう。富の世代間伝達を考えれば、より資産（生涯所得やストック）の多い層が、利他的な遺産動機を持つであろう。それに関連する世帯主の年収、金融資産、負債、及び実物資産の代理変数として持ち家ダミー - を取り上げる。ただし我々が利用するのは 1 時点のデータなので、生涯所得を完全には把握できていない可能性がある。生涯所得に影響するものとして、年齢及びその自乗項（係数の見やすさのため 100 で除した）

を取り上げる⁵⁾。同様の観点から世帯主の学歴（中卒、短大卒、大卒ダミー。高卒が既定値）を取り上げる。

富の世代間伝達を考えた場合、それは世代間で繰り返されることがある。いわば子々孫々に富を伝えることで、家系（family）の資産蓄積を増して、その社会的権威を高めようということが考えられる。そこで遺産の受け取り経験有り、受け取り経験無し（「まだ、遺産を受け取っていない」が規定値）を考慮する。

「事業を継いでくれた場合に残す」ということを考えた場合、実際に事業を継ぐ可能性があるのは世帯主が個人経営・自営業と農林漁業というケースに限定されるであろう（勤労者では余り考えられない）。この世帯主の職業ダミー（自営業ダミー）を取り上げる。

子供との同居に関する状況は、戦略的遺産動機におけるモニタリングとしての役割を果たす。すなわち親子が同居していれば子供は親の消費・貯蓄状況を観察できるし、親からすれば子供の自分に対する対応状況を把握できる。また利他的な遺産動機に関しても、子供がより身近にいるほど強くなる可能性がある。そこで同居している子供の人数、別居しているが同一市区町村内に住む子供の人数、その他の地域に住む子供の人数を取り上げる。

配偶者の有無（具体的には「離婚、死別」）も併せて考察する。配偶者がいない場合は、たとえば夫から子供に直接に資産の移転が行われる。その時夫に利他的な遺産動機（母親がいなくて可哀想）、あるいは子供に頼る（妻がいないので子供に身の回りの世話を依存する）意識が強ければ、これは戦略的遺産動機にも影響するであろう。

分析に当たっては男女を一括した分析と併せて、回答者の性別毎の分析も行った。意識に関する問題で夫婦（男女）間でそれが同一とは限らないこと、平均すれば男性が先に死亡することを考えたためである。

2) 計量方法

本稿で取り上げる遺産動機の選択肢は4個である。遺産動機の形態について序列はつけられないと考えられるので、この多肢的選択モデルの分析方法とし

では Multinomial Logit モデルによることにする。これについて若干解説する (Greene [1997]、縄田 [1997] 参照)。

i 番目の経済主体により s 個の選択肢から j 番目の選択が行われたとする。このことは i にとり他の選択肢よりも j の効用が等しいか大きいことを意味している。効用を

$$U_{ij} = X_{ij} \beta_j + \epsilon_{ij} \quad (1)$$

と書くこととする。ここで X_{ij} は経済主体 i が j を選ぶときに影響すると考えられる説明変数ベクトル、 β_j は係数ベクトルである。

ϵ_{ij} は誤差項で互いに独立で $\exp(-\exp(-z))$ の累積分布とする。

j は他の選択肢より効用が高いのだから

$$P(U_{ij} > U_{ik}) \quad \text{for all other } j \neq k$$

となる。書き換えると次のようになる。

$$U_{ij}^* = U_{ij} - U_{ik} = V_{ij} + \epsilon_{ij}^* \quad (2)$$

$$V_{ij} = X_{ij} \beta_j - X_{ik} \beta_k \quad \epsilon_{ij}^* = \epsilon_{ij} - \epsilon_{ik}$$

このとき Multinomial Logit モデルは以下により求められる。

$$P_{ij} = P(Y_i = j | X_i) = \frac{\exp(V_{ij})}{\sum_{j=0}^{s-1} \exp(V_{ij})} \quad (3)$$

$$j=0, \dots, s-1 \quad V_{i0} = 0 \quad V_{ij} = X_{ij} \beta_j \quad 0$$

尤度関数は次式による。

$$L = \prod_{Y_i=0} P_{i0} \prod_{Y_i=1} P_{i1} \dots \prod_{Y_i=s-1} P_{ij} \quad (4)$$

Multinomial Logit モデルの場合、その推計結果の係数は相対的な odds の比率を示すので⁶⁾、解釈は必ずしも容易ではない。個々の説明変数の直接的な影響をみるためには次のマ - ジナル効果を分析する必要がある (Cramer [1991] 参照)。マ - ジナル効果を β_j と書くことにする。

$$\beta_j = \frac{P_j}{X_i} = P_j \left(\beta_j - \sum_{j=0}^{s-1} P_j \beta_j \right) \quad (5)$$

この β_j の符号は β_j の符号と一致するとは限らない。またその大きさも β_j とは関連しないことに留意する必要がある。

β_j の漸近的な分散共分散は次により求められる。

$$\text{Asy.Var}[\hat{\beta}_j] = G_j \text{Asy.Var}[\beta_j] G_j$$

は全てのパラメ - タベクトルである。

$$\text{Asy.Var}[\hat{\beta}_j] = \sum_{m=0}^{j-1} V_{jm} \text{Asy.Cov}[\hat{\beta}_j, \hat{\beta}_m] V_{jm} \quad (j, m=0, \dots, J-1) \quad (6)$$

ここで $V_{jm} = [1 - P_j] \{P_j I - \beta_j \beta_j'\} - P_j [1 - P_m]$

$$I = \begin{cases} 1 & \text{if } j=m \\ 0 & \text{otherwise} \end{cases}$$

これによりマ - ジナル効果の有意水準を求めることができる。したがってマ - ジナル効果の有意水準と Multinomial Logit モデルの有意水準が一致するという必然性は必ずしもない⁷⁾。

4 推計結果

Multinomial Logit モデルの推計に当たり、利他的遺産動機を基準とした。したがって Multinomial Logit モデルの推計から得られる各パラメ - タは、利他的遺産動機の選択に比べて、その説明変数が当該遺産動機を選択にどのように影響しているかをみることになる。

まず回答者全体の推計を行い、回答者が男性、女性ですべての係数が異なるかどうかをみるために性別に推計を行い、尤度比検定を試みた。

尤度比検定統計量は $90.59 (= -2 \times (-1385.14 + 737.49 + 602.35))$ である。自由度 51 の χ^2 分布の 5% 点は 68.67 であるから、男女間でパラメ - タが共通であるという帰無仮説は棄却される⁸⁾。これから男女間で遺産動機の形成は異なることが示された(表 2-1、表 3-1 参照)。

=== 表 2-1 ===

=== 表 2-2 ===

1) 男性の遺産動機

(Multinomial Logit モデル)

Multinomial Logit モデル自体の係数をみると、「遺産動機無し(残さない)」で、

世帯主収入と持ち家ダミ - が有意に負となっている。これからより豊かな層で世代間の所得移転が行われていることがうかがわれ、それにより将来的には格差の拡大につながることを示唆される。我が国では、遺産（余れば残す場合を含めて）は、麻生[1998]が示唆するように、金融資産よりも土地・住宅が主体である。土地・不動産は換金が容易ではないので、金融資産に比べて消費に充当することは困難である。言い換えれば純粋にライフサイクル仮説的に行動する人は持ち家の選好が少ないとも言えよう（遺産を選好する人は、土地・住宅をより選好するとも言えよう）。

遺産受け取りダミ - がすべてのケースで有意に負である。利他的遺産動機が基準なので、この結果は遺産受け取り経験がある場合は相対的に利他的遺産動機の選好が強いことを意味する。言い換えれば遺産により世代間で富の伝達が繰り返されることを示唆している。

この二つの結果からは、遺産が我が国の分配の不平等につながっていることを示していよう。

（マージナル効果）

マ - ジナル効果についてみる。利他的な遺産動機では、世帯主収入は 1%水準で有意に正であり、それが 1%上昇すれば 0.06%利他的遺産動機の確率が高まることがわかる。持ち家ダミ - も正である。我が国家計の資産の太宗が不動産（土地と住宅）であるから、土地を通じた世代間移転が強いことが改めて示唆される⁹⁾。

教育歴はすべて有意に正である（基準は高卒）。これについては将来の所得の予想より、現段階での所得・資産が遺産に関する意識を規定しているのかもしれない。

1%水準で遺産受け取りダミ - は有意に正、受け取り経験無しは有意に負である。この遺産受け取り経験に関する結果は、遺産により家計の権威を保つあるいは増大させる傾向があることを示唆している。子供に関する 3 つの説明変数はすべて有意に正である。子供の存在が利他的動機に結びついている。

無配偶者が有意に正である。後述する女性に関する推計結果と比較すると、父子家庭は親子の結びつきが強いのかもかもしれない。

戦略的遺産動機では、自営業ダミ - が 1%水準で有意に正というのは期待される場所である。注目されるのは世帯主収入（負）、金融資産（負）、負債（負）、持ち家（正）がすべて 1%水準で有意ということである。また学歴では中卒が正、大卒が負で有意である。このことは継ぐべき資産の多寡というより、「事業の継続」あるいは「面倒をみてくれたら」という意味は、貧しさをを含めた全てをいわばひっくるめて引き受けて欲しいということかもしれない。言い換えると家族内社会保障機能に強い期待を持つ人が、戦略的遺産動機を選好している可能性がある。介護等の問題を考えた場合、戦略的遺産動機を持つ人は介護も含めて「全て面倒をみる」ことを期待しているのかもしれない。

それが相対的に貧しい人に多いということは、本来社会保障がより必要な階層に、社会保障が十分な期待を与えていない可能性を示唆する。今後の年金制度の行き詰まりや、介護保険制度の運営に危惧がもたれる現状では、このことは重要な課題を投げかけるものと言えよう。

「余れば残す」という人は約 45%をしめる多数派である。そこで注目されるのは持ち家ダミ - が 1%水準で有意に負ということである。利他的、戦略的遺産動機の結果とあわせると、「持ち家」が遺産を積極的に残すことの選好につながっていることがわかる。自営業ダミ - も有意に負であることも、資産、家業の存在が世代間移転の促進につながっていることをうかがわせる。子供については同居人員は 10%水準で有意に正であるが、同一地区の子供数は 1%水準で有意に負と逆転しており、子供についての効果は必ずしも明確ではない。

「残さない」は世帯主収入が 5%水準で、持ち家ダミ - が 1%水準で有意に負である。貧しい階層では残さない（あるいは残せない）傾向があると言えよう。換金が困難で消費に充当することが必ずしも容易ではない住宅については、残す意志がないから取得していないということであろう。遺産受け取りダミ - も 5%水準で有意に負であり、これは世代を越えた富の移転の裏返しといえよう。同居子供数も有意に負であり、子供が身近にいない場合は遺産選好が弱まるということかもしれない。

2) 女性の遺産動機

ここでは男性との比較を中心にマージナル効果について簡単にみてみたい。

利他的遺産動機では、自営業ダミ - が有意ではない（戦略的遺産動機の場合も同様である）。これは女性が、男性に比べると、家業というものの継続にはそれほど関心はないということかもしれない（あるいは女性が経営主体であることが少ないことを反映しているとも言えよう）。ただし、遺産受け取り経験の有る無しは男性と同様の効果を見せており、家系の威信には強い選好がうかがわれる。

同居子供人員、同一地区内子供人員は有意に正であるが、その他の地区の子供人員は統計的に有意ではない。男性と比べると女性は身近な子供により残すということかもしれない。無配偶者ダミ - は有意な結果は得られていない。

戦略的遺産動機では、世帯主収入（負）、金融資産（負）、負債（負）、持ち家（正）、自営業ダミ - （正）がすべて 1%ないし 10%水準で有意であり、男性と共通している。女性の場合も全てを含めて「面倒をみる」ことを期待しているのかもしれない。注目されるのはその他の地区の子供人員が有意に負であることである。女性は遠くに離れて住む子供には期待しないということなのかもしれない。無配偶者ダミ - も 1%水準で有意に負であり、夫がいない場合は子供に期待するより、自立するという姿をうかがわせている。

「余れば残す」では、持ち家ダミ - が 10%水準で有意に正である。積極的に残すとまではいかないが、女性の場合は結果として残るのは差し支えないということかもしれない。子供に関する変数は全て有意ではない。男性に比べると結果にゆだねる姿がうかがわれる。

「残さない」では持ち家ダミ - が 1%水準で有意に負、遺産受け取り経験無しが 5%水準で正であり、男性と共通している。同居子供数が 5%水準で有意に負であり、子供が身近にいないと女性は、遺産を選好しないことが改めて裏付けられている。

=== 表 3-1 ===

=== 表 3-2 ===

5 おわりに

本稿では、多様な遺産動機がどのように形成されているかをみた。そこではまず男女間では遺産動機の形成が異なることがわかった。利他的遺産動機（男性の方が約 10%多い）、遺産動機無し（女性の方が 7%多い）という全体の傾向だけでなく、遺産動機形成に関する個別の要因についても、子供を中心に異なることが示された。この違いが何によるものかは様々な要因があり得る。考えられる一つの要因は、日本の家計資産の多くが男性（夫）名義であり、それが男性に家系を残すことをより強く意識させていることである。もう一つの要因は、平均すれば女性（妻）の方が長命でありそのために財産を取り崩す必要性が高いということである。つまり、自立していこうとする女性が多ければ、それは財産をより多く取り崩すことになるので遺産を残さない（あるいは残せない）ことを、反映している可能性がある。

利他的な遺産動機を持つ人の中では、世代を越えた（世代間で繰り返す）富の移転が行われており、資産の不平等につながることを示唆された。また戦略的な遺産動機を持つ人の中では、全てを含めて面倒をみる家族内社会保障が期待されていた。介護問題や社会保障制度の行き詰まりを考えると、この動きは親の全ての資産が、子供による親に対する保障として機能する可能性を示唆している。

これらの遺産動機の形成に大きな影響を与えているのは「持ち家」と「子供」である。遺産を残すために住宅・土地を取得するというところもあるが、改めて我が国における土地のウエイトの高さを示している。

利他的遺産動機でこの移転が行われるときは、資産格差の拡大を意味するものである。世代間移転による資産格差の拡大に関し、特段それを政策的に優遇する根拠はない。それについては相続税の課税に任せればよいであろう。

他方で、それが戦略的遺産動機に結びつく場合、家族内社会保障に期待することは女性（特に高齢の女性や子供（男性）の配偶者）の負担を増すばかりで、社会的には必ずしも好ましくない。むしろ、我が国ではほとんど普及していない、土地・住宅を利用した老後生活のための信託制度の改善による土地の流動

化が望ましいであろう。あるいは土地に比べれば税制上遙かに不利な扱いをされている金融資産の課税を見直し、土地の相対的な有利さを改め、それにより土地の流動化を促すことが妥当である。なぜならば家族内社会保障は、我が国の経験からいって、所詮は女性に過重な負担をもたらすことが多いからである。

子供の存在が遺産動機の形成に大きく影響するのは予想されることである。男性で子供がいることの影響がより強いということは、利他的遺産動機の選好の強さとあわせると、男性は女性に比べ相対的に家系の威信の確保に敏感ということを示唆している。

配偶者がいない場合、男性は利他的・戦略的遺産動機を選好している。これは女性とは対照的な姿である。これは男性が遺産を選好するという背景に、(しばしば指摘されるように)男性が家庭の実生活では余り能力がなく、高齢になれば誰かに依存したいということを示しているのかもしれない。その意味では一部の企業や自治体などで行われている、老後を自立して生活できるような社会生活・家庭生活の訓練の拡充が望まれるということであろう。

遺産動機の形成が、人々の就業や消費・貯蓄行動にどのような影響を与えているかは、政策的に極めて重要な課題である。それには Multinomial Logit モデルの Sample Selection モデルで推計を行う必要がある。その検証は引き続き行うこととしたい。

1) 富の分配との関係について Kotlikoff and Summers [1981]、Modigliani [1988]、Load [1992]、石川 [1991] 参照。また Alessie, Lusardi and Aldershof [1997] はオランダのパネルデータ (Socio Economic Panel) により高齢の家計間で貯蓄行動にかなり差があることを指摘している。

2) 調査の詳細については牧 [1998] を参照されたい。

3) 「その他」という調査項目があるが、意味がとり難いため分析からは除いている。

4) 質問から明らかなように、この遺産動機は親から子への世代間のものである。夫(妻)から妻(夫)へという世代内の遺産動機は除かれている。

5) 年齢は、死をより強く意識する代理変数と捉えることも無論可能である。20

歳代や 30 歳代を含む分析であれば、その点に留意する必要がある。ただ本稿で取り上げる 50 歳以上であれば、人々は老後や遺産の関係をより強く意識しているであろうから、ここでは本文のように考えた。

6) $\ln[P_{ij} / P_{i0}]$ で示される。

7) マ - ジナル効果の値 (係数) そのものは、基準を何にとるかによって異なることはない。しかしその有意水準は 6) 式に見られるように基準化によって異なる。この点は結果の解釈に当たって留意する必要がある。

8) 全体の推計では回答者に関し「女性ダミ - 」を入れた推計も行った。推計結果によれば戦略的遺産動機、遺産動機 (余り)、遺産動機無し (残さない) はいずれも 1% または 5% 水準で有意に正であった。これから女性は男性に比べ利他的遺産動機を相対的に選択しないことが分かる。またマ - ジナル効果では利他的遺産動機を選択で女性ダミ - は 1% 水準で有意に負であった。

9) ダミ - 変数はその平均で評価しているのので、値自体は参考までである。

表1 記述統計量

変数名	(1) 全 体				(2) 男 性				(3) 女 性			
	平均値	標準偏差	最小値	最大値	平均値	標準偏差	最小値	最大値	平均値	標準偏差	最小値	最大値
年齢	61.6664	7.4188	50	84	62.5409	7.2170	50	82	60.6368	7.5265	50	84
(年齢) ²	38.5774	9.3476	25.00	70.56	9.6338	9.1515	25.00	67.24	37.3338	9.4305	25.00	70.56
世帯主収入(対数値)	5.9952	0.7967	1.609	8.517	6.0001	0.7592	1.609	8.049	5.9895	0.8393	2.833	8.517
金融資産(対数値)	6.1509	2.5595	0.000	10.60	6.2811	2.5028	0.000	10.60	5.9975	2.6185	0.000	9.996
負債(対数値)	1.6698	2.8377	0.000	9.999	1.8257	2.9299	0.000	9.999	1.4863	2.7162	0.000	9.616
持ち家ダミー	0.8514	0.3559	0	1	0.8670	0.3399	0	1	0.8330	0.3733	0	1
自営業ダミー	0.2419	0.4284	0	1	0.2602	0.4391	0	1	0.2203	0.4148	0	1
遺産動機(利他)ダミー	0.2047	0.4037	0	1	0.2529	0.4350	0	1	0.1480	0.3554	0	1
遺産動機(戦略)ダミー	0.1138	0.3177	0	1	0.1170	0.3216	0	1	0.1102	0.3134	0	1
遺産動機(余り)ダミー	0.4648	0.4990	0	1	0.4459	0.4974	0	1	0.4871	0.5003	0	1
遺産動機なしダミー	0.2166	0.4121	0	1	0.1842	0.3879	0	1	0.2547	0.4361	0	1
中卒ダミー	0.3375	0.4731	0	1	0.3260	0.4691	0	1	0.3511	0.4777	0	1
高卒ダミー	0.4435	0.4970	0	1	0.4532	0.4982	0	1	0.4320	0.4958	0	1
短大卒ダミー	0.0435	0.2040	0	1	0.0453	0.2082	0	1	0.0413	0.1992	0	1
大卒ダミー	0.1684	0.3744	0	1	0.1667	0.3730	0	1	0.1704	0.3763	0	1
遺産受け取りダミー	0.3502	0.4772	0	1	0.3553	0.4789	0	1	0.3442	0.4755	0	1
遺産なしダミー	0.2925	0.4551	0	1	0.3143	0.4646	0	1	0.2668	0.4427	0	1
遺産まだダミー	0.3573	0.4794	0	1	0.3304	0.4707	0	1	0.3890	0.4879	0	1
同居子供数	0.6308	0.7529	0	4	0.5980	0.7101	0	4	0.6695	0.7993	0	4
近隣別居子供数	0.4040	0.6950	0	4	0.4211	0.6959	0	3	0.3838	0.6941	0	4
その他別居子供数	0.8285	0.9529	0	5	0.8816	0.9660	0	4	0.7659	0.9342	0	5
無配偶者ダミー	0.1115	0.3148	0	1	0.0599	0.2376	0	1	0.1721	0.3778	0	1
女性ダミー	0.4593	0.4985	0	1								
サンプル数	1265				684				581			

表2-1 遺産動機の推定結果（全体）

	戦略的	余り	残さない
定数項	-3.815 (-0.51)	5.042 (0.95)	0.799** (1.97)
年齢	0.131 (0.57)	-0.0262 (-0.16)	-0.167 (-0.83)
(年齢) ²	-0.128 (-0.70)	-0.0120 (-0.092)	0.0992 (0.63)
世帯主収入（対数値）	-0.195 (-1.19)	-0.190 (-1.54)	-0.550*** (-3.53)
金融資産（対数値）	-0.0502 (-1.14)	-0.0356 (-1.03)	-0.106*** (-2.60)
負債（対数値）	-0.0724* (-1.79)	-0.0479* (-1.73)	-0.0093 (-0.26)
持ち家ダミー	1.356** (2.07)	-0.263 (-0.85)	-1.636*** (-5.14)
自営業ダミー	0.378 (1.64)	-0.245 (-1.39)	-0.398* (-1.65)
中卒ダミー	0.732** (2.93)	-0.188 (-0.99)	0.137 (0.59)
短大卒ダミー	-0.642 (-0.97)	-0.101 (-0.29)	-0.585 (-1.10)
大卒ダミー	-0.0126 (-0.033)	0.479** (2.08)	0.367 (1.22)
遺産受け取りダミー	-0.630** (-2.44)	-0.597*** (-3.28)	-1.305*** (-5.11)
遺産なしダミー	0.398 (1.27)	0.514** (2.17)	0.708** (2.62)
同居子供数	-0.0329 (-0.20)	-0.142 (-1.25)	-0.730*** (-4.79)
近隣子供数	0.320** (2.03)	-0.193 (-1.49)	-0.290* (-1.83)
その他子供数	0.0483 (0.36)	-0.0409 (-0.43)	-0.333*** (-2.78)
無配偶者ダミー	-0.138 (-0.34)	-0.218 (-0.77)	0.389 (1.22)
対数尤度	-1385.137		

注) カッコ内は漸近的 t 値。***は1%、**は5%、*は10%有意。

表2-2 遺産動機のマージナル効果（全体）

	利他的	戦略的	余り	残さない
定数項	-0.914*** (-3.89)	-0.789*** (-7.03)	0.243 (0.40)	1.460 (1.51)
年齢	0.00622 (0.87)	0.0153*** (4.49)	0.00265 (0.14)	-0.0242 (-0.81)
(年齢) ²	0.00015 (0.027)	0.0120*** (-4.49)	-0.00595 (-0.40)	0.0178 (0.76)
世帯主収入（対数値）	0.0432*** (7.39)	0.00206 (0.77)	0.0141 (0.94)	-0.0593** (-2.48)
金融資産（対数値）	0.00847*** (5.60)	-0.00073 (-1.06)	0.00361 (0.92)	-0.0114* (-1.87)
負債（対数値）	0.00674*** (5.18)	-0.00363*** (-5.92)	-0.00745** (-2.17)	0.00434 (0.80)
持ち家ダミー	0.0603*** (4.53)	0.156*** (19.7)	0.0209 (0.62)	-0.237*** (-4.56)
自営業ダミー	0.0328*** (3.80)	0.0510*** (12.1)	-0.0423* (-1.87)	-0.0415 (1.16)
中卒ダミー	0.00122 (0.15)	0.0694*** (17.1)	-0.0961*** (-4.33)	0.0255 (0.75)
短大卒ダミー	0.0435** (2.30)	-0.0399*** (-4.50)	0.0617 (1.24)	-0.0653 (-0.83)
大卒ダミー	-0.0634*** (-5.83)	-0.0310*** (-6.06)	0.0856*** (3.02)	0.00882 (0.20)
遺産受け取りダミー	0.121*** (12.1)	-0.00218 (-0.50)	0.00519 (0.21)	-0.124*** (-3.03)
遺産なしダミー	-0.0868*** (-8.58)	-0.00346 (-0.76)	0.0418 (1.64)	0.0485 (1.23)
同居子供数	0.0415*** (7.06)	0.0164*** (6.00)	0.348** (2.32)	-0.0927*** (-3.66)
近隣子供数	0.0246*** (4.29)	0.0417*** (14.5)	-0.0367** (-2.46)	-0.0296 (-1.26)
その他子供数	0.0152*** (3.47)	0.0117*** (5.59)	0.0187 (1.62)	-0.0457** (-2.48)
無配偶者ダミー	0.0118 (1.04)	-0.00737 (-1.36)	-0.0840*** (-2.75)	0.0796* (1.68)

注) カッコ内は漸近的 t 値。***は1%、**は5%、*は10%有意。

表3-1 男女別遺産動機の推定結果

	(1) 男性			(2) 女性		
	戦略的	余り	残さない	戦略的	余り	残さない
定数項	-3.020 (-0.30)	-4.361 (-0.62)	11.227 (1.24)	-2.367 (-0.19)	11.330 (1.30)	10.785 (1.08)
年齢	0.104 (0.34)	0.251 (1.14)	-0.106 (-0.38)	0.0950 (0.25)	-0.188 (-0.69)	-0.0833 (-0.27)
(年齢) ²	-0.111 (-0.47)	-0.209 (-1.21)	0.0782 (0.36)	-0.0975 (-0.32)	0.0930 (0.43)	0.00870 (0.035)
世帯主収入(対数値)	-0.315 (-1.44)	-0.193 (-1.18)	-0.688*** (-3.04)	-0.128 (-0.49)	-0.195 (-0.96)	-0.495** (-2.08)
金融資産(対数値)	0.0592 (0.93)	0.0111 (0.25)	-0.0518 (-0.90)	-0.166** (-2.25)	-0.122* (-1.93)	-0.187*** (-2.72)
負債(対数値)	-0.0590 (-1.18)	-0.0561 (-1.62)	0.0202 (0.40)	-0.0765 (-1.01)	-0.0132 (-0.26)	-0.00667 (-0.11)
持ち家ダミー	1.495 (1.37)	-0.660 (-1.50)	-2.331*** (-5.02)	1.37 (1.61)	-0.0167 (-0.036)	-1.196** (-2.55)
自営業ダミー	0.305 (1.02)	-0.403* (-1.79)	-0.443 (-1.34)	0.625 (1.58)	0.0801 (0.26)	-0.322 (-0.82)
中卒ダミー	0.0987 (0.30)	-0.336 (-1.36)	0.0149 (0.046)	1.583*** (3.71)	0.00428 (0.014)	0.262 (0.72)
短大卒ダミー	-0.528 (-0.75)	-0.310 (-0.71)	-1.903* (-1.71)	-10.74 (-0.053)	0.149 (0.26)	0.214 (0.30)
大卒ダミー	-0.568 (-1.17)	0.0486 (0.17)	-0.601 (-1.39)	1.051 (1.53)	1.310** (2.90)	1.590*** (3.06)
遺産受け取りダミー	-0.696** (-2.06)	-0.598** (-2.48)	-1.829** (-4.76)	-0.630 (-1.49)	-0.672** (-2.23)	-1.025*** (-2.72)
遺産なしダミー	0.391 (0.98)	0.593** (1.99)	0.317 (0.87)	0.322 (0.60)	0.421 (1.02)	1.119** (2.54)
同居子供数	0.0417 (0.18)	-0.146 (-0.93)	-1.014*** (-4.39)	-0.259 (-1.01)	-0.251 (-1.39)	-0.694*** (-3.15)
近隣子供数	0.472** (2.24)	-0.278 (-1.64)	-0.244 (-1.13)	0.176 (0.69)	-0.102 (-0.49)	-0.354 (-1.43)
その他子供数	0.197 (1.12)	-0.115 (-0.92)	-0.482*** (-2.86)	-0.118 (-0.53)	0.0739 (0.45)	-0.148 (-0.79)
無配偶者ダミー	0.122 (0.20)	-1.271** (-2.33)	-0.240 (-0.43)	-0.358 (-0.61)	0.0614 (0.16)	0.460 (1.07)
対数尤度	-737.4891			-602.3545		

注) カッコ内は漸近的t値。***は1%、**は5%、*は10%有意。

表3-2 男女別遺産動機のマージナル効果

	(1) 男性				(2) 女性			
	利他的	戦略的	余り	残さない	利他的	戦略的	余り	残さない
定数項	0.296 (1.01)	0.188 (-1.62)	-1.659** (-2.77)	1.552 (1.48)	-1.205** (3.65)	-0.593** (-4.56)	1.362 (1.00)	0.435 (0.24)
年齢	-0.0327** (-3.63)	-0.00229 (-0.65)	0.0642** (3.52)	-0.0292 (-0.93)	0.0165* (1.65)	0.0114** (2.91)	-0.0374 (-0.88)	0.00948 (0.17)
(年齢) ²	0.0281** (4.02)	-0.000165 (-0.060)	-0.0514** (-3.62)	0.0235 (0.96)	-0.00678 (-0.86)	-0.00775** (-2.51)	0.0245 (0.73)	-0.00995 (-0.22)
世帯主収入(対数値)	0.0559** (7.10)	-0.00978** (-3.38)	0.0128 (0.85)	-0.0590** (-2.13)	0.0319** (3.91)	0.00568* (1.84)	0.0241 (0.72)	-0.0617 (-1.38)
金融資産(対数値)	-0.00134 (-0.72)	-0.00544** (7.22)	0.00306 (0.82)	-0.00715 (-1.11)	0.0166** (6.36)	-0.00222** (-2.55)	0.000946 (0.096)	-0.0153 (-1.24)
負債(対数値)	0.00833** (5.17)	-0.00268** (-4.21)	-0.0122** (-3.75)	0.00659 (1.15)	0.00177 (0.90)	-0.00331** (-4.29)	-0.000016 (-0.002)	0.00156 (0.14)
持ち家ダミー	0.124** (6.27)	0.199** (19.6)	-0.0916** (-2.58)	-0.232** (-3.62)	0.0300* (1.81)	0.0835** (10.16)	0.119* (1.68)	-0.232** (-2.48)
自営業ダミー	0.0600** (5.53)	0.0542** (12.3)	-0.0878** (-4.11)	-0.0264 (-0.72)	0.000274 (-0.022)	0.0326** (6.34)	0.0448 (0.83)	-0.0772 (-1.04)
中卒ダミー	0.0417** (3.98)	0.0263** (6.39)	-0.0901** (-4.25)	0.0222 (0.62)	-0.0199* (-1.68)	0.0751** (14.21)	-0.0825 (-1.64)	0.0272 (0.41)
短大卒ダミー	0.116** (3.28)	-0.00764 (-0.55)	0.0733 (1.03)	-0.182 (-1.38)	0.0573** (2.51)	-0.540** (-21.09)	0.330** (3.39)	0.153 (1.15)
大卒ダミー	0.0276** (1.97)	-0.0464** (-8.53)	0.0806** (2.86)	-0.0619 (-1.26)	-0.160** (-7.92)	-0.00715 (-1.05)	0.0707 (0.97)	0.0960 (1.03)
遺産受け取りダミー	0.156** (11.31)	-0.00883* (-1.82)	0.00552 (0.22)	-0.153** (-2.79)	0.0892** (6.57)	0.00177 (0.37)	-0.00486 (-0.092)	-0.0862 (-1.24)
遺産なしダミー	-0.0991** (-8.23)	0.000568 (0.12)	0.107** (4.54)	-0.00859 (-0.21)	-0.0707** (4.44)	-0.0107* (-1.81)	-0.0600 (-0.94)	0.141* (1.72)
同居子供数	0.0510** (6.02)	0.0242** (7.19)	0.0272* (1.67)	-0.102** (-3.09)	0.0435** (5.33)	0.00339 (1.15)	0.0415 (1.29)	-0.0884** (-2.07)
近隣子供数	0.0326** (4.61)	0.0603** (19.32)	-0.0783** (-5.60)	-0.0147 (-0.62)	0.0180** (2.20)	0.0162** (4.93)	0.0183 (0.53)	-0.0525 (-1.14)
その他子供数	0.0258** (4.46)	0.0299** (12.21)	0.00775 (-0.69)	-0.0479** (-2.29)	-0.000146 (-0.024)	-0.00622** (-2.65)	0.0419 (1.59)	-0.0355 (-1.02)
無配偶者ダミー	0.173** (9.48)	0.0802** (11.15)	-0.308** (-8.11)	0.0545 (0.87)	-0.0170 (-1.21)	-0.0254** (-4.46)	-0.0373 (-0.62)	0.0796 (1.01)

注) カッコ内は漸近的t値。***は1%、**は5%、*は10%有意。

参考文献

- 麻生良文[1998]「相続を通じた世代間移転」『経済研究』49,pp.289-296。
- 麻生良文・神谷佳孝[1998]「王朝モデルは成り立つか」『郵政研究レビュー』第8号,pp.1-51。
- 石川経夫[1991]『所得と富』岩波書店。
- 大竹文雄[1991]「遺産動機と高齢者の貯蓄・労働供給」『経済研究』42, pp.21-30。
- 大竹文雄・ホリオカ,チャールズ=ユウジ[1994]「貯蓄動機」、石川経夫編『日本の所得と富の分配』所収、東京大学出版会。
- 橋木俊詔[1999]『日本の経済格差』岩波新書。
- 中馬宏之・浅野哲[1993]「遺産動機と生命保険需要」『経済研究』44, pp.137-147。
- 縄田和満[1997]「probit・logit・tobit」『応用計量経済学』多賀出版。
- 牧寛久[1998]「家計の金融資産選択行動の実態 - 第5回 家計における金融資産選択に関する調査 - 結果より」郵政研究所月報, 1998年3月号。
- 松浦克己・滋野由紀子[1996]『女性の就業と富の分配』日本評論社。
- Alessie, R., A. Lusardi and T. Aldershof [1997], "Income and Wealth over the Life Cycle: Evidence from Panel Data," Review of Income and Wealth, 43(1), pp.1-32.
- Cramer, J.S. [1991], The Logit Model, London: Edward Arnold.
- Dekle, R. [1989], "A Simulation Model of Saving, Residential Choice, and Bequests of the Japanese Elderly," Economic Letters, 29, pp.129-133.
- Greene, W.H. [1997], Econometric Analysis, 3rd. ed., London: Prentice-Hall International.
- Kotlikoff, L.J. and L. Summers [1981], "The Role of Intergenerational Transfers in Aggregate Capital Accumulation," Journal of Political Economy, 89, pp.706-732.
- Load, W.A. [1992], "Saving, Wealth, and the Exchange-Bequest Motive," Canadian Journal of Economics, 25(3), pp.743-753.
- Matsuura, K. and Y. Shigeno [1999], "Age-based Inequality of Consumption, Income and Wealth," mimeo.
- Modigliani, F. [1988], "The Role of Intergenerational Transfers and Life Cycle Saving in the Accumulation of Wealth," Journal of Economic Perspectives, 2, pp.15-40.
- Ohtake, F. [1991], "Bequest Motives of Aged Households in Japan," Ricerche Economiche, 45 (2-3), pp.283-306.